

# 『世界の食料安全保障： わが国の食料と農業を取り巻く 国際環境』

板垣 啓四郎（著）

国際領域 研究員 小倉 達也



『世界の食料安全保障：  
わが国の食料と農業を取り  
巻く国際環境』  
著者／板垣 啓四郎  
出版年／2024年  
発行所／筑波書房

近年、食料安全保障という言葉が注目を集めています。世界では、栄養不足人口（飢餓人口）が約7億人存在するとされており、食料不安を抱える人々は約24億人存在するとされています。わが国でも、令和6年に食料・農業・農村基本法の改正が行われ、食料安全保障の確保が基本理念の柱として位置づけられました。

本書は、視野を広くとり、日本を含めた世界の食料安全保障の現状を概観することを目的としています。具体的には、開発途上国と先進国そして日本の3つのカテゴリに分けて食料安全保障の現状を検討しています。

まず、開発途上国の現状ですが、予想されるとおり栄養不足人口と食料不安人口の多くが開発途上国において存在しています。途上国の中でも、特にサハラ以南アフリカと南アジア地域において状況は深刻です。アフリカ地域に着目すると、地域の特徴として貧困のうちに暮らす小規模農家によって大多数の農業が営まれており、その生産性は様々な要因により低く安定性がないことが挙げられます。したがって、食料および栄養の不足が蔓延し貧困から脱出することが難しいと言えます。状況を改善するためには、「多様で栄養価の高い食料を安定的に安全かつ安価に供給し、それにアクセスしやすい状況を確保すること」が求められます。具体的な方策としては、国内の農業生産性を高めることや種々インフラの整備によりフードサプライチェーンを高度化することが考えられます。

次に、先進国の現状ですが、栄養不足人口と食料不安人口は途上国と比較するとそれほど大きくありません。先進国地域の特徴は、アフリカ地域と対照的であり、農業の規模は大きく、生産性も高く、フードサプライチェーンは高度化されています。その結果、先進国地域は開発途上国やわが国に多くの輸出を行うことによって、重要な食料供給源となっ

ています。食料安全保障上の課題としては気候変動への対応や土壌・水資源の保全と生産性・品質の確保の両立などが挙げられます。

最後に、日本の現状ですが、FAO（国際連合食糧農業機関）の定義に従った4つの柱（入手可能性・アクセス・利用・安定性）に沿って検討が行われます。食料の入手可能性に関しては、食料が不足する事態は想定されません。食料のアクセスに関しては、低所得者および遠隔地に居住する高齢者などに問題が生じる可能性があります。食料の利用に関しては、大きな問題は想定されません。食料の安定性に関しては、食料や農業資機材の多くを輸入に依存していることもあり、気候変動や政治・経済的要因による食料・生産資材価格の高騰が大きく影響を与えられます。

以上、食料安全保障の現状を途上国・先進国・日本の3地域に分けて検討が行われましたが、本書では最後に日本が世界の食料安全保障を達成するための役割が検討されています。具体的には、「国際貿易と海外投資のルールづくり、食料の備蓄体制づくり、気候変動対応策への提案、国際農業協力」の4つの点が検討されています。その中でも、国際農業協力が日本の最も貢献できる役割であると筆者は述べています。具体的な施策として、JICA（独立行政法人国際協力機構）によりアフリカ稲作振興や市場志向型農業振興が実施されています。

ここでは挙げきれませんでしたでしたが、本書では各地域・国ごとに具体的な食料安全保障対策が詳細に検討されています。食料安全保障の概念に関心がある方には、是非本書を一読することをお勧めします。